

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

- 100号記念セミナー 山岡洋一
 - ― 翻訳の過去・現在・未来
過去 25 年ほどに翻訳をめぐる環境は様変わりしてきた。翻訳そのものについても、関連する教育や辞書についても、いまほどの機会が開けている時期は過去 100 年になかったと思われる。
- 翻訳を翻訳する 河原清志
 - ― 翻訳とは何か―研究としての翻訳（その2）
「等価」(equivalence) という概念は翻訳を学び、実践し、研究する上で、必要不可欠な概念であり、「翻訳は等価に始まり等価に終わる」とさえ言えよう。100号で翻訳とは「言語的・社会的等価実現行為」とであると概括したが、今回は文法的等価実現行為を中心に考察してみたい。
- おすすめしたい韓国の本 福田知美
 - ― 北朝鮮の人々はどのように生きているか
南北の統一を目指している「民族 21」という会社が北朝鮮の人々の日常生活を調査し記録した本を紹介する。
- 辞書・検索サイト むしゅ
武舎広幸
 - ― *DictJuggler.net* のバージョンアップ
文章に携わる人のための辞書・検索サイト DictJuggler.net の新バージョンをこのほど公開し、複数の辞書を同時に検索できるようにした。
- お知らせ 山岡洋一
 - ― 最難関を目指す「翻訳通信」翻訳コンテスト
一読したぐらいでは理解できない文章こそ、翻訳する価値がある。そういう観点から、難しい課題の翻訳を競うコンテストを開催する。
- お知らせ 山岡洋一
 - ― 「訳したい本」の投稿の呼び掛け

翻訳通信 〒216-0005 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp
(@は半角文字に変えてください)

定期講読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳の過去・現在・未来

以下は2010年8月28日に開催された「翻訳通信」100号記念セミナーでの発言に大幅な加筆と訂正をくわえたものである。

はじめに

過去3年間に、当初は金融市場が、やがて経済全体が猛烈な危機に見舞われ、100年に一度の危機だといわれました。翻訳関係者にとっても他人ごとではなく、収入面で打撃を受けた人が少なくなかったのではないのでしょうか。

出版業界はすでに、10年以上にわたって不況が続いていたうえ、経済危機で雑誌の広告収入が激減し、リストラに追い込まれた出版社もありました。翻訳書の売れ行きも落ちたようです。そのうえ出版点数の増加が続いているため、1点当たりの売上が落ち、印税収入に依存している出版翻訳者には厳しい状況になりました。

産業翻訳はいつもながら分野によって違いがあるとはいえ、全体的に大きく落ちこんだといえるようです。企業などが発注する分量が減ったうえ、競争の激化で単価が下がり、二重に打撃になった翻訳者が少なくないとみられます。

100年に一度の危機だという見方が正しいのであれば、こういう時期もあると諦めざるを得ないように感じられますが、そうとばかりはいえませんが。危機というのはいつも、名もなく貧しく見苦しいものにとって好機でもあります。弱い立場のものは危機の際にとくに打撃を受けるからこそ、精神を集中して考えるようになり、それまで目の前にあっても気づかなかった新しい機会を見つけられるのでしょうか。危機だからこそ張り切るべきだともいえるのです。

それに、翻訳という分野に限っていうなら、過去100年になかったといえるほどの機会が生じています。100年に一度の機会を逃す手はないと思います。翻訳の未来にどのような機会が開けているのか、その機会をどう活かすべきかを以下で考えていきますが、その前に少し遠回りをしなければなりません。翻訳の未来を考えるにはまず、過去がどうであったのか、翻訳がどこからきて、どこまで来たのかを知らなければなりません。ですが、日々の仕事と生活

に追われていると、時代の移り変わりといった点はなかなかみえてきません。そこで、まずは過去のある時点をとって、そのころに翻訳がどうであったかを振り返り、過去と現在を考えるヒントとしてみましょう。

私事で恐縮ですが、翻訳ではじめて収入を得たのはほぼ30年前です。そのとき、産業翻訳の英和で400字詰め原稿用紙1枚当たりの単価が1000円だったと記憶しています。当時はまだ原稿用紙を使っていたのです。新人の翻訳者にとって1000円の単価が高いか安いかは一概にはいえませんが、いまでも、ベテランの産業翻訳者が400字当たり1000円の単価で仕事をしているケースは少なくないようなので、参考のために記しておきます。

ときどき行っていた翻訳が専門になったのは25年前です。当時勤めていた小さな会社で翻訳部門に配属されたときです。この部門は主に企業から翻訳を受注し、在宅翻訳者に依頼して仕事をこなしていました。このときの上司が口癖のように、「翻訳者は数年たつと筆が荒れて使えなくなる」といっていたのを思い出します。いまではたぶん、少なくとも真剣に翻訳に取り組んでいる人にとっては理解しにくいことではと思いますが、これが当時の実態でした。

個人的にも当時、これでは筆が荒れると実感を感じたことがあります。ある日の夕方、その上司に呼ばれて、たった2ページだから明日の朝までに訳してくれと、英語の文書をわたされました。読んでみると、原子力発電所の原子炉内部で核分裂がどのように起こっているのかを論じているようでした。原子力力というのはそのとき、まったく知らない分野でしたから、内容を理解することなど、まったくできません。そこで、定刻で仕事を終え、帰宅することにしました。途中で大きな書店により、原子力関係の辞書を2点、ようやく見つけて買いました。自宅で未明までかかって翻訳しましたが、当然ながら、意味がさっぱり分からないまま、構文解析を行い、それらしい訳語をあてはめていくしかありません。内

心忸怩たる思いをしながら提出したのですが、何日かたって顧客に褒められたという話を聞き、愕然としました。もっと勉強してほしいといわれるのならともかく、しっかり訳せているというのですから。これを続けていけばすぐに手を抜くことを覚え、筆が荒れてくるのは目にみえています。

いまの時点になって振り返ってみると、こういうことが起こる理由をはっきりしています。当時、翻訳者には専門分野という感覚があまりなかったと思います。英語の翻訳者なら英和も和英もこなすのが当然だったし、どの分野の翻訳でも引き受けるのが当然でした。辞書さえあればどんな分野の翻訳でもできるというのが常識でした。なぜこれが常識だったかという、翻訳調という規範がきわめて強い力をもっていたからです。この規範のもとでは、翻訳者に要求される点は明確でした。構文解析を間違えなく行い、決められた訳語（辞書に記された訳語）を使って、原文の語句を漏れなく一対一対応で訳していくことでした。原文の意味を考える必要はなく、意味がさっぱり分からなくても翻訳はできるとみられていました。

これが規範だというのは、この公式に違反した翻訳者に対して、厳しい制裁が課されたからです。出版翻訳なら、編集者から声が掛からなくなります。産業翻訳の場合には顧客に怒鳴られ、違反がはなはだしいと判断されれば、発注を打ち切られます。当時、翻訳営業の担当者は、菓子折をもって顧客に謝りにいくのが仕事のうちかなり重要な部分を占めていたほどです。

たとえば、構文解析を間違えれば、誤訳だとされてもっとも厳しい制裁を受けます。何でもない言葉、たとえば原文の very の訳語が見あたらない訳し方をすると、訳抜けだとされます。A, B, and C を「甲、乙、丙」と訳すと、「甲、乙及び丙」でなければいけないといわれます。辞書に記されていない訳語を使うと、「意識」だとされて減点されます。接続詞の but を「そして」と訳すととんでもない誤訳だとされます。要するに、翻訳調は翻訳のスタイルであるだけでなく、強制力をもった規範として、翻訳者に対して強い力をもっていたのです。

この時代には、翻訳者は翻訳調の規範に縛られており、数年もたつと筆が荒れて使えなくなるなどといわれていたわけですが、収入という面ではまずまず恵まれていたように思います。翻訳は当時もいま

もプロの仕事ですから、翻訳者の間で収入の差が大きいという現実があります。そこそこの高収入が得られる翻訳者がいる一方で、生活費を稼ぐのに苦労している翻訳者がいるのです。しかし 1980 年代半ばには、翻訳者は稼ぎすぎにならないよう注意すべきだといえる状況がありました。新進の翻訳者が一流の翻訳家に助言を求めたところ、稼ぎすぎはいけない、3000 万円以上稼いではいけないといわれたという逸話があるほどです。

当時もいまも、質の高い翻訳ができるとみられるようになるのは容易ではないのですが、当時は翻訳者としての評判が確立すれば、働きすぎ、稼ぎすぎを心配しなければならないほど仕事があったといえます。その背景には、逆説的ではありますが、翻訳が職業として確立していなかったという事情があったのだと思います。当時の翻訳調の翻訳は、「知識人」になるための教育を受けたものにとって、できてあたりまえだとみられていました。昔の武士なら剣術や馬術ができて当然だったように、昔の商人なら読み書きそろばんができて当然だったように、「知識人」なら翻訳ができて当然だったのです。しかし、翻訳の技術はもっと高級な仕事のために使うべきであり、生活費稼ぐの手段にするなど、もってのほかだとされていました。翻訳というのは、頭をかきながら、「すみません」といわなければならない仕事でした。わたしなども、「翻訳なんかやっていないで自分で書けよ」とよくいわれたものです。そういうわけで、翻訳者になる人は少なかったといえます。数年もすれば筆が荒れて使い物にならなくなるなどといわれながら、その数年間にうんと稼いで、つぎの仕事を探すのが普通だったともいえます。

いまでは状況がまったく違います。翻訳は短期間にうんと稼いでつぎの仕事に移っていく性格ではなくなっています。長く続けるほど面白くなっていく仕事になったのです。収入面で有利だとはいえないものの、面白さとやりがいという点ではめったにないほど素晴らしい仕事になりました。翻訳調の軛から解放されて、翻訳が本来もっている力が発揮されるようになりました。だが、これはまだ第一歩にすぎないと思います。翻訳は今後、文化という観点で日本の社会にもっともっと貢献するようになると思います。

いまの時点にたつて振り返るからいえることですが、1980 年代半ばという時期は、日本の翻訳の歴史で分水嶺になったように思います。そうなのは、

大きな危機があったからです。1985年9月22日のプラザ合意をきっかけに、円高ドル安が急激に進みました。ドルが240円前後から150円前後まで急激に下落しました。その結果、1986年にかけて日本経済は激しい円高不況に見舞われています。このときの危機感は、何年かの後には滑稽だと思えたほどでした。日本経済は先進国ではアメリカについて輸出依存度が低いのですが、にもかかわらず、輸出が経済を支えているという見方が強いという現実があります。日本はエネルギーと食料を輸入に依存しており、輸出が減少すれば、これらを輸入できなくなり、経済が成り立たなくなると信じられているのです。そこで、円高ドル安が急速に進んだとき、輸出産業が壊滅して、街に失業者が溢れると予想されました。滑稽なほどの危機感がバネになって日本経済は急速に回復し、振りが逆に振れすぎて空前の好景気になり、バブルになります。不況から好況への転換にあたってカギになったのは、いわゆる「円高メリット」でした。

円高不況では産業翻訳も打撃を受けています。それまで、産業翻訳は輸出企業を主な顧客にしていました。電子機器、機械、プラントなどの輸出に伴って、膨大な取扱説明書の翻訳が必要になったからです。当然ながら、日英など、外国語への翻訳が中心でした。当時は日本人の翻訳者が外国語に訳し、それを「ネイティブ」のチェッカーがチェックする方式をとっていました（「ネイティブ・チェッカー」というと聞こえはいいのですが、たいていは日本まで流れ着いた流れ者で、日本語は片言程度だし、肝心の英語力も心許ないという人が大部分でしたが）。猛烈な円高で輸出産業が打撃を受けると、外国語方向への翻訳需要が急減し、産業翻訳業界は猛烈な不況に見舞われました。

しかしこの危機のなかで、翻訳には新しい機会が生まれています。第1に、円高になって海外の製品や資産が半値で買えるようになり、製品輸入と海外資産の購入がブームになりました。その際に発生するのは、英日など、日本語方向への翻訳です。顧客も、外資系など、それまでとは性格がかなり違う企業が中心になりました。

第2に、円高不況を乗り切って自信を取り戻したとき、日本社会に大きな変化が起こったように思います。幕末以来、150年近く続いた欧米崇拝の呪縛がこのとき解けたのでしょうか。円高にひかれて、日本に仕事を求めにくる外国人が飛躍的に増えました

（アメリカやイギリスなどから、日本語ができる翻訳者が大量に押し寄せ、日英翻訳の主力になったのもこのころです）。円高で海外旅行が増えたことから、欧米が身近になりました。こうして国際化と国際交流が進んだ結果、まだ見ぬ理想の社会として欧米を崇拝する見方が消えたのでしょうか。

その点が翻訳に与えた影響を示す逸話を紹介しましょう。1980年代後半のバブル期に、外資系メーカーの翻訳発注担当者から聞いた話です。少し前まで、製品パンフレットの翻訳は直訳調でないと営業部門から文句がでたのだそうです。せっかく舶来品を売っているのに、バタ臭くない文章ではありがたみがないといわれたそうです。ところがいまでは（1980年代後半には）、直訳調の文章だと顧客が読んでも読めないといわれて営業部門からすぐクレームがつくようになってきているというのです。

「舶来品」とか「バタ臭い」とかは、いまでは死語に近い言葉ですが、25年ほど前にはまだ生きた言葉でした。舶来品を無条件にありがたがる風潮があり、そのために、バタ臭い文章、つまり翻訳調の文章がもてはやされていました。1980年代半ばの円高不況を契機に日本社会ははるかに成熟し、欧米崇拝の風潮が薄れています。欧米にもアジアにも日本にも、良いものがあり、悪いものもあると考えるようになっていきます。それとともに、翻訳調がもてはやされることもなくなったといえるでしょう。

産業翻訳は社会の動きにじつに敏感に反応するので、以上の2点の機会はいずれも、まずは産業翻訳にあらわれています。しかしすぐに出版翻訳にも影響を与えるようになったとみられます。第1に、それまで産業翻訳では日英などの外国語への翻訳が高級で、英日など、日本語への翻訳は低級だとみられていました。英日は日英ができない初心者の仕事だとされていたのです。このため、産業翻訳者が出版翻訳に進出するのは心理的に抵抗感があったはずで、ところが、バブル期以降、外国語への翻訳は外国人の翻訳者が担当することが多くなり、日本語への翻訳が日本人翻訳者にとって仕事の中心になると、こういう抵抗感が薄れています。1990年代以降、産業翻訳から出版翻訳に進出する翻訳者が増えたのは、このような背景があったからだと思います。

第2に、出版翻訳のなかでもノンフィクション翻訳の分野はそれまで、翻訳家という以外に肩書きをもたない翻訳者にとって進出が難しい分野で、主に

学者や評論家が訳者になっていましたが、翻訳調の衰退とともに、担い手が変わっています。学者訳を読者が受け付けなくなったため、翻訳調とは違うスタイルを使える翻訳家の出番が増えたのです。いまでは、フィクション、ノンフィクションを問わず、一般読者向けの翻訳書を学者や評論家の名義で出版するケースはむしろ例外的になっていますから、出版翻訳をめぐる環境は一変したといえるでしょう。

翻訳の過去 — 翻訳調とは何だったのか

では、規範として強い強制力をもっていた翻訳調とは何だったのか。この点については、「翻訳通信」で何度もとりあげてきました。少し違った角度からこの点を取り上げたものに、2009年12月から[日経ビジネス・オンライン](#)に連載した「[古典を読んでもさっぱり分からなかった人へ](#)」があります。まったく誰も予想していなかったのですが、アクセス数とコメント数がサイトのベスト10に入った連載です。無料の読者登録が必要ですが、一読いただければ幸いです。

そこに書いたことですが、翻訳調とは何かを考えるうえでいちばん参考になるのは、誰でも知っている英文和訳の方法です。英文和訳というのは、翻訳調を学校で教えるために簡易化したものだからです。英文和訳の方法は、中学1年で学んだことを思い出せば、理解できるはずです。たとえば、以下のように教えられなかったでしょうか。

"Are you a girl?" = 「あなたは少女ですか」

これが典型だという理由はいくつかありますが、とくに重要な点は決まった訳語を使って、決まった訳し方で訳していることです。ここで、**you** は「あなた」、**girl** は「少女」と訳すように教えられます。誰が誰に対して、どのような場面で、なぜこう質問したかは一切考えず、こんな質問をしては失礼ではないかとか、馬鹿にされないかとかはちらっとでも考えず、決められた通りに訳すよう教えられるのです。

"Are you a girl?"というセンテンスはもちろん、教育用に作られたもので、まったく馬鹿げているといえます。12歳か13歳の男の子や女の子に教えるのに適切なセンテンスだとはとても思えません。これだけで英語の授業が嫌いになり、成績が悪くなる生徒がいても不思議だとは思えません（わたしもそのひとりでしたから）。ですが、このセンテンス自体

は、英語で使われるはずがないとはいえません。試しにインターネットの検索サイトで検索すると、"are you a girl"というフレーズで数百万の用例があることが分かります。たいていは、"Are you a girl or a woman?"など、前後に何かがついているのですが、それでも用例があるのは確かです。そして、どのような人がどのような人に対して、どのような状況で、なぜこう質問するのかを考えてみると、いくつかの案が頭に浮かぶはずですが、

思い浮かばないとするとおそらく、**girl** という語のイメージがよく分からないからではないかと思えます。翻訳者なら、この語のように、中学1年か2年で学ぶ基本語こそ、難しいことを知っているはずですが、語義の範囲が広いので、理解するのが簡単ではないのです。だから、基本語は何百回でも何千回でも辞書を引き、コーパス（全文データベース）で用例を調べて、意味を理解しようと努めます。この**girl** についても、英和や英々の辞書を引いて、イメージをつかむよう努力してみてください。そうすれば"Are you a girl?"というセンテンスが使われる状況をいくつか思い浮かべられるようになるはずです。

では、「あなたは少女ですか」はどうでしょうか。こんな日本語はないと断言しても、そう間違いではないと思えます。日本語擬き^{もど}きであって日本語ではないといえるのではないのでしょうか。どのような人がどのような人に対して、どのような状況で、なぜこう質問するのかを考えてみると、そう簡単には答えが思い浮かばないはずですが、

英文和訳ではこのような日本語擬きを使うように教えられます。意味を考えてはいけなく、状況を考えず、決められた通りに訳すように教えられるのです。外国語を学ぶと、母語の世界から外国語を眺めると同時に、外国語の観点から母語を眺めるようになって、言語に敏感になるはずですが、英文和訳では逆に、言語に鈍感になるよう強いており、まったくもったいないことだと思えます。

ではなぜ、このような訳し方を教えるのか。英文和訳が翻訳調に基づくものであり、翻訳調では意味や状況を考えることなく、決まった訳語を使って決まった訳し方で訳すことになってきたからです。翻訳調で訳すとき、意味や状況は考えないのです。なぜかという、翻訳調の翻訳は「原書」を読むための参考資料だったからであり、その際に原文の意味

が分からないのが当然の前提だったからです。

翻訳調の特徴を図 1 にまとめました。翻訳調では、読者は「原書」を読んで意味を考えるべきだとされてきました。ですが、「原書」は「難解」であり、簡単に意味が分かるようなものではありません。そこで、参考資料として翻訳が用意されます。翻訳は構文と語句という原文の表面がどうなっているかを示すものであって、これだけで原文を理解できるようにはなっていません。このため翻訳にはかならず訳注がついており、たいていは解説もついています（解説は訳書とは別に刊行される場合もあります）。翻訳と訳注と解説がセットになって、「原書」を読む読者を支援する仕組みになっていました。

翻訳調は明治半ばに、理解することなどとてもできないほど進んだ欧米の文化をとり入れるための手段として広く採用されました。明治政府は急速な近代化をはかるために、翻訳によって欧米の文化を吸収する政策（翻訳主義の政策）をとり、この国策にしたがった翻訳で主流になったスタイルが翻訳調だったのです。翻訳調はいわば、新興国型の翻訳スタイルだったといえます。

このため、科学技術、社会科学、哲学など、論理を扱う分野が翻訳調の主戦場になりました。また、翻訳調による翻訳を支えるために、中学以降の外国語教育や辞書などの大量のインフラが作られました。外国語教育で翻訳調の手法が教えられ、英和などの辞書に翻訳調で使える訳語の一覧が記載されました。

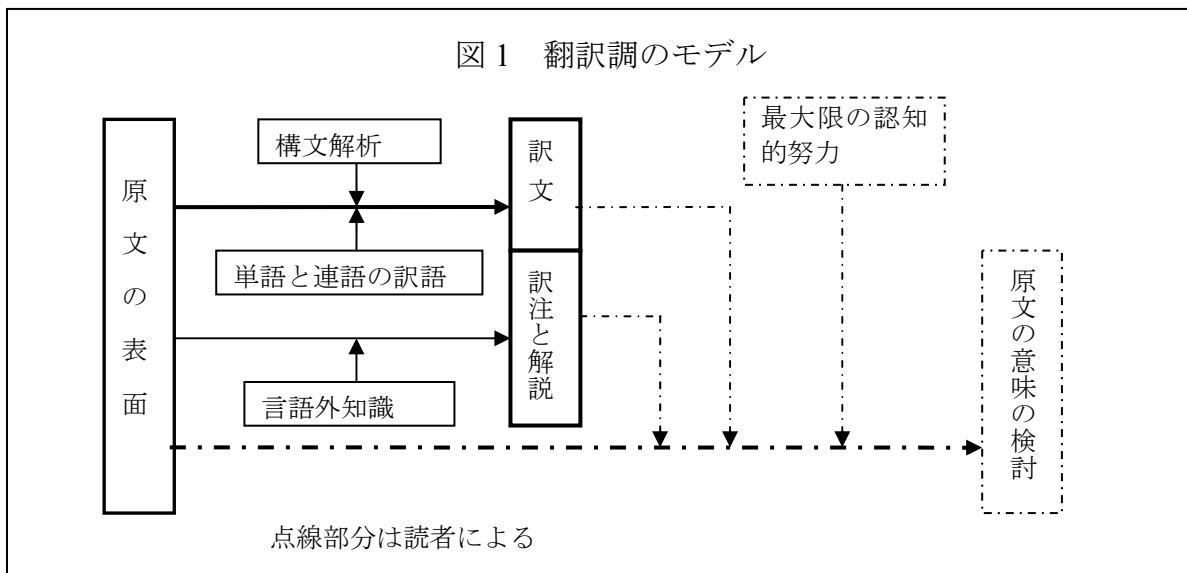
翻訳調、英語などの外国語教育、英和などの辞書はいつてみれば三脚椅子の脚のような関係にあり、

ひとつの脚が折れれば、全体が倒れる関係にあったのです。

翻訳調の目的は、急速な近代化を達成することにあります。明治以降、100 年以上を経過したいまでは、翻訳調という手段を使って、日本の社会が所期の目的を達成したのは明らかだと思います。翻訳主義と翻訳調が失敗だったなどは誰にもいわせない、これが翻訳者として当然の立場だと思います。翻訳調には栄光の歴史があるのです。近代化の達成という目的を達成したうえ、その過程でいまの日本語を作ってきたのですから。

しかし、所期の目的を達成した栄光のときに墮落がはじまっているのが世の中のつねです。翻訳調も例外ではありません。いまの時点で振り返ってみると、戦後の高度経済成長期が終わるころにはすでに、翻訳調の墮落がかなり明確になっていたと思います。第 1 に、分からないのが当然だという感覚が薄れたことから、翻訳調の「難解な」訳文が知ったかぶりの手段になりました。"Are you a girl?"なら、ある程度は意味や状況が理解できるのに、「あなたは少女ですか」では意味や状況がほとんど理解不可能なように、翻訳調の訳文を読んでも、たいていの人は意味が理解できません。人は「普通の人には理解できないことを理解できるように振る舞いたがるものだ」とアダム・スミスが書いていますが（『国富論』第 4 編第 9 章）、まさにその通りの状況になったのです。

第 2 に、戦後の高度経済成長期のころから、一流の学者や研究者が翻訳の仕事を敬遠するようになっていきます。日本が新興国の段階を抜けだして先進国



の一角にくわわったとみられるようになって、学者や研究者が翻訳を本業だとは考えなくなったのです。ところが、読者が一流の学者・研究者による翻訳を求めていたため（あるいは、出版社がそう信じていたため）、出版翻訳は下訳者に依存するようになり、当初は主に助手や大学院生が下訳を行っていましたが、やがて翻訳を敬遠する傾向が広まったため、学生や翻訳学習者を起用するようになってきました。論理を扱う分野ではとくに、この傾向が顕著になっています。当然ながら翻訳の質は低下します。翻訳調の翻訳が一般読者に嫌われるようになったのは当然でした。

翻訳調の主戦場は論理を扱う分野であり、それ以外の分野、たとえば文学などには以前から翻訳調ではない翻訳スタイルの潮流があります。この点ととくに顕著なのがエンタテインメント小説の分野です。いわゆる純文学と古典小説の翻訳が学者の領分だったのに対して、エンタテインメント小説は出版翻訳のなかで唯一、他に肩書きをもたない翻訳家が扱える分野でした。この分野では原書を読むための参考資料として訳書を求める読者がいるとは考えにくいので、訳書だけを読む読者を想定した翻訳が可能です。そういう背景があって、翻訳調に代わる翻訳スタイルがまず発達したのは、エンタテインメント小説の分野だったといえます。

翻訳の現在 — 飛躍のチャンス

翻訳の歴史という観点から現状をみると、おそらく、翻訳調という規範の強制力が衰えたことが最大の特徴でしょう。いいかえれば、翻訳調に代わる規範がまだあらわれていない空位の時期になっているといえるはずですが、いくつかの翻訳スタイルがあらわれてきていますが、規範といえるほどの力をもったスタイルはまだ登場していません。「読みやすく分かりやすい翻訳」が合い言葉になっていますが、いってみれば、翻訳調は読みにくく分かりにくかったという泣き言のようなもので、規範といえるほど要件が明確になってはいません。

そのなかでも新しい翻訳スタイルに共通する特徴があらわれてきています。原文の意味を伝えることを重視する点です。原文の意味を伝えるというのは翻訳である以上、当然のことだと思えるかもしれませんが、たしかに当然です。ですが、翻訳調は原文の意味ではなく表面（構文と語句）を伝えることを目的としていました。"Are you a girl?"を「あなたは少女ですか」を訳するのはそのためです。ですから、翻

訳調を否定してあらわれた新しい翻訳スタイルが意味を伝えることを共通の特徴としているのは、理に適ったことなのです。

意味を伝えるという原点に戻ったとき、翻訳という仕事の性格は様変わりします。数年たつと筆が荒れるというのは過去の話になりました。原子炉内部の核分裂を説明する文書を翻訳した話をしましたが、そのときに使ったのは典型的な翻訳調のスタイルです。このスタイルで訳したとき、疲労感だけが残る結果になりますが、それは自分の訳が正しいという確信がもてないからです。構文解析には最善を尽くしていますが、間違っている可能性もあります。訳語の選択にも辞書を見て、最善を尽くしていますが、こちらは間違っている可能性がかなり高いとみるべきです。ですが、どこが正しくどこが間違っているかを判断する材料は翻訳者にはもっていません。意味を伝えることを目的としたとき、この問題は比較的簡単に解決します。訳文を読んで意味が通じているかを考えればいいのです。もちろん、そのためには翻訳を通じて、原子力なら原子力という分野に詳しくないなければなりません。その条件があれば、訳文を読んで意味が通じない部分、意味が分からない部分を探していくと、構文解析の間違いや訳語の選択の間違いに気づけるようになります。

自分が書いた訳文を見直して間違いに気づくというのは、それほど簡単なことではありません。他人の訳の間違いならすぐに気づくのに、自分が書いた訳文の間違いにはなかなか気づかないものです。自惚れなどの性格の悪さが障害になるのですね。しかし、この技術が少しずつでも身につけていくと、翻訳という仕事の魅力は飛躍的に高まります。フィードバックのループができて、好循環になります。このため、意味を伝えることを目的とする翻訳には学習効果が高いという特徴があります。おそらく、翻訳者ならみな、よく知っていることだと思いますが、翻訳を行えば、外国語の読解力、母語の執筆能力、内容の理解力が高まっていきます。

原文を読んで意味を理解できなければ訳文は書けません。書けたとしても意味の通じない訳文になるので、訳文を見直したときに気づくこともあります。たとえば原文の構文解析を間違えたとします。構文解析というと大層なことのように思えるかもしれませんが、「ゆとり教育」前の高校で教えられた文法で解決できるのが普通です。もっと高度な文法理論を必要とすることはめったにありません。間違いが

多いのは and で何と何が並列されているのか、代名詞が何を指しているのか、関係代名詞の先行詞は何なのかといった単純な点です（単純だからこそ難しいのですが）。こうした点で間違えると筋が通らなくなることが多いので、間違いに気づく可能性が高くなります。こうしたフィードバックを繰り返していると、構文解析力が自然に身につけていきます。

語句の意味を理解できていないことによる間違いもよく起こります。学校英語では前述の「girl=少女」のような組み合わせをたくさん教えられますが、言葉というものはこうはできていません。英語の girl が日本語の「少女」と同じであるなどということはありません。英語の単語とその訳語を丸暗記するという方法では翻訳はできません。翻訳を行うには、たとえば girl という単語がどのようなイメージをもっているのか、いいかえれば、どのような範囲の語義をもっているかを知らなければなりません。原文の語句から直接に訳語を導き出す方法は翻訳調では正解ですが、これでは意味を伝える翻訳は不可能です。原文の語句、そしてもっと大きな単位であるセンテンスやパラグラフが伝えるイメージ（意味）を理解し、文脈に相応しい日本語表現を探すという手順を踏みます。語句の意味を理解できていない場合、原文を理解できないか、訳文がおかしくなるので、辞書やコーパスを使って意味を理解しようと努めます。こうしたフィードバックを繰り返していると、語句の意味に対する理解が自然に深まっていきます。

翻訳は「語学」の仕事だというのが一般的なイメージですが、これはまったくの間違いだと思います。翻訳調の時代にはたしかにそういう面がありましたが、いまでは翻訳者はみな、母語（目標言語）で勝負しています。翻訳とは母語での執筆の仕事であり、外国語はそのために必要な補助的手段のひとつしかありません。母語で明晰な文章、美しい文章、原文の文体や味を伝える文章が書けなければ、質の高い翻訳はできないのです。翻訳者は翻訳を行うなかで、つねに表現に苦しみ、適切な表現を探しています。訳文を見直し、原文に立ち返って、母語の表現を磨いていきます。こうしたフィードバックを繰り返していると、日本語の執筆力が自然に高まっています。

翻訳者はたいてい、専門分野の知識をほぼすべて、翻訳を行うなかで学んでいます。参考文献などを読んで学ぶ部分も多いのですが、圧倒的な部分は原文

から学んでいます。翻訳を行ったことがあれば実感しているはずですが、翻訳では通常の読書とは桁が違うほど細かく、深く原文を読み込みます。だから、内容を細かく、深く理解できるのです。理解が間違っていれば、訳文が書けないか、訳文の見直しのときに筋が通らない文章になっていることに気づく場合が多いので、原文を読み直し、参考文献にもあたって、納得できるまで考えます。こうしたフィードバックを繰り返していると、内容の理解力が自然に高まっています。

要するに、翻訳の学習効果が高いのは、「分からない」ことに気づく機会が多いからだと思います。読解、訳出、見直しの各段階でさまざまな点が「分からない」ことに気づかされます。これが糸口になって学習が進みます。どこが「分からない」かを認識する能力が翻訳の質を決めるともいえます。翻訳の世界には、「分かると思うな、思えば負けよ」という格言があるくらいです。

三脚椅子のあと 2 本の脚はどうなっているのでしょうか。英語教育についていうなら、翻訳調が衰退するとともに、訳読教育が崩壊しています。ある意味で当然のことでしょう。明治以来の訳読教育は、翻訳調の翻訳者を育成し、選別することを目的としていたといえるのですから。

訳読教育が崩壊した後の「ゆとり教育」で重視されているのは、いわゆるコミュニケーション・アプローチです。英語で英語を教える直接法によって、主に日常的な英会話を教えるようとしています。文部科学省は「高等学校教育指導要領」で、英語の「授業は英語で行うことを基本とする」と規定し、「高等学校教育指導要領解説」で、「訳読、和文英訳、文法指導が中心にならないよう留意する」と指示しています。受講者が母語で獲得した言語能力を無視して外国語を教える方法は、植民地での教育の特徴でした。たとえばイギリスがインドなどで、日本が朝鮮半島と台湾でこういう教育を行っていました。ですが、植民地での教育は日常会話に重点をおいていたわけではありません。論理的なコミュニケーション能力と思考能力を育成することも重視していたのです。宗主国の言語で教育を受けた人のなかから、独立運動を指導し、独立後の新興国を指導する政治家がでてきたことをみれば、この点は明らかだと思います。論理的なコミュニケーション能力と思考能力の育成を軽視した教育では、国際舞台で活躍する人材が育ってくるはずがないと思います。

いまでは、学校の英語教育で訳読や文法はタブー視されています。明治以来の訳読教育と文法教育は失敗だったというのでしょうか。そういうのであれば、どこに証拠があるのかと問いたいただきたいと思います。19世紀半ばの新興国のなかで、日本がいち早く近代化を達成できたのはさまざまな要因が重なったからでしょうか、翻訳主義と翻訳調による欧米文化の吸収が寄与しなかったなどといえるのでしょうか。翻訳主義を背後で支えた訳読教育と文法教育が失敗だったなどといえるのでしょうか。

訳読教育と文法教育への敵視は馬鹿馬鹿しいほどの勘違いと誤解に基づくものなのでしょうが、おそらくは目的を達成して墮落するようになった時期の翻訳調や訳読教育への嫌悪感が出発点になっているのだと思います。訳読教育を嫌うお役人は、翻訳調が衰退した後、翻訳の学習効果が飛躍的に高まった事実を知らないのでしょう。翻訳の学習効果はいまのところ、翻訳関係者だけが知っている秘密なので、文部科学省のお役人が知らないとしても不思議ではありません。翻訳の学習効果はいま、翻訳関係者が社会に貢献できる点になっていると思います。

もうひとつの脚である辞書についていうなら、紙の辞書の売上が急減して、新たな辞書の開発が困難になっているという問題があります。電子辞書が普及していますが、出版社にとって電子辞書では単価が低すぎて、開発費を回収できるようなにはなっていないようです。紙の辞書の再利用で少しばかりの追加収入が得られるだけというのが現実だと思います。

現在の英和辞典は大部分、翻訳調の規範のもとで最適化されています。翻訳の新しい潮流で得られた

ノウハウに基づくなら、はるかに優れた辞書を開発することができると思います。この点も翻訳関係者にとって大きな機会になる可能性があります。

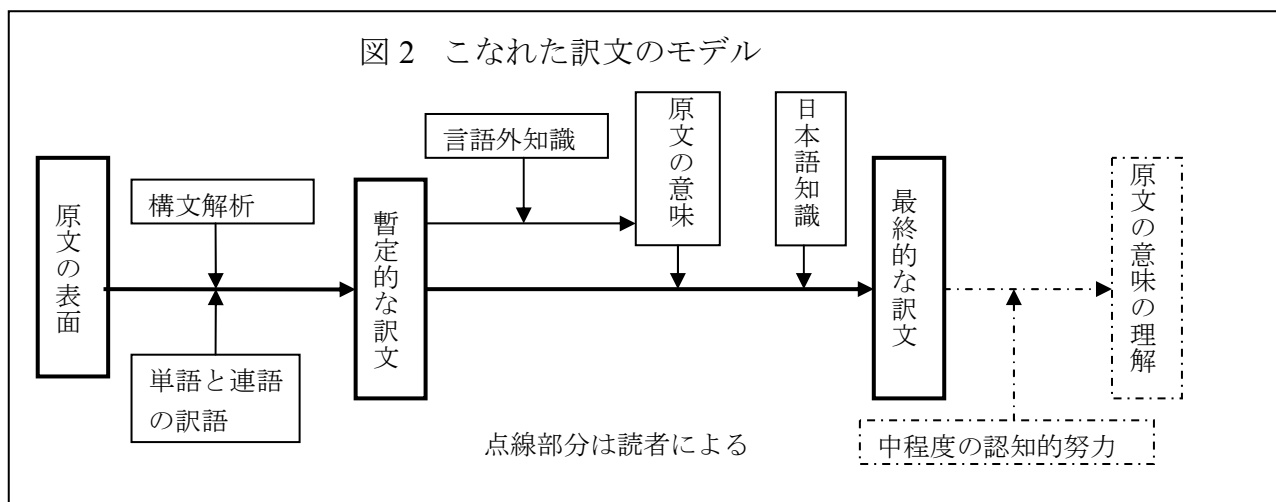
翻訳の未来

以上のような現状から、翻訳にはいま、大きな可能性が開けているといえます。この点がもっと顕著なのが、おそらく出版翻訳の世界でしょう。この世界には、まったく新しい翻訳スタイルを開発する余地が充分にあり、それを受け入れる基盤が出版社にも読者にもあると思います。さらに、翻訳者が獲得したノウハウを学習と教育、辞書に活かす可能性が開けています。

まず、新しい翻訳スタイルについてみていきましょう。現在、翻訳関係者の合い言葉になっているのは、「読みやすく分かりやすい」訳文、「こなれた」訳文です。これは翻訳調が読みにくく分かりにくかったという反省（あるいは泣き言）を出発点にしていますが、危険な道でもあります。「こなれた訳文」にしようとするとき、たいていは図2に示した過程をたどります。つまり、翻訳調のスタイルで訳した訳文を、意味の理解と日本語知識によって書き直していく方法をとります。「暫定的な訳文」までを下訳者が担当し、その訳文を読んで元訳者（ときには編集者）が書き直していく場合もあり、その場合には伝言ゲームのようになって、読みやすく分かりやすいが、原文の意味を伝えるという点では問題のある訳文になる危険があります。原文のうち分かりにくく難しい部分を削除して分かりやすくしようという誘惑にかられることもあるでしょう。

こうしたことの結果、原著への忠実性という点で問題のある訳書が少なくないので改めて強調しておきますが、翻訳というからには、原著への忠実性は

図2 こなれた訳文のモデル



何よりも重要です。忠実性が保たれていない翻訳は、どれほど読みやすくても、どれほど名文であっても、翻訳としての価値は低いという点を強調しておきます。

それと変わらぬほど重要なのは、読みやすく分かりやすい訳書がほんとうに読む価値があるのかという点です。読書の醍醐味はたとえば、それまでに考えたこともなかった難しい問題を考えるヒントを与えてくれることにあります。一読したぐらいではとても理解できない本こそ、読む価値があるのです。この原点を忘れたとき、読書の魅力は急速に薄れていきます。だから、「読みやすく分かりやすい」訳文を追求するのは、じつはとても危険なことだと思います。

翻訳者や編集者なら、まったく別の方向をとるべきだと思います。誰が何といおうと、是非とも読んでほしいと思える本を翻訳し、出版することを考えるべきだと思うのです。翻訳者はいたこであり、翻訳は口寄せだというと、神秘主義だと笑われるかもしれませんが、そういう面があるのはたしかです。翻訳の理論、技術、技法、ツールなどは重要ですが、それだけで翻訳の質が高まるわけではありません。翻訳者にとって何よりも重要なのは、原著者と原著に対する敬意や熱意、共鳴、共感です。自分はこの本を訳すために生まれてきたのだといえる本、この本の内容を是非とも日本の読者に伝えたいと思える本、そういう本を訳すときに、翻訳者の力が最大限に発揮されます。読者に感動を与えられる本、読者が読書の素晴らしさを味わえる本が生まれます。

そういう本を訳そうと思うのであれば、翻訳者は発注を待つだけの姿勢をとるべきではありません。仕事にはたいい波がありますから、暇な時間を利用して、いちばん訳したい本を訳していくのがいいでしょう。編集者は新刊だけを追いかける姿勢をとるべきではありません。出版から少なくとも数年たった本のなかから、素晴らしい本を探すべきでしょう。時間の試練を受けて生き残っているのなら、読みごたえがある本である可能性が高いからです。

こういう観点で翻訳を行うのであれば、原著の文体や味を活かすために、新しい翻訳スタイルを開発することも可能です。翻訳調の縛りがほぼなくなったいま、読者は新しいスタイルの翻訳を受け入れる姿勢をとっているとみられます。出版社の編集者も、もちろん個人差があるものの、新しい翻訳スタイル

への抵抗はあまりないとみられます。翻訳調という規範が崩れたのはその意味で、ほんとうにありがたいことでした。この機会を活かさない手はありません。翻訳者にとって、新しい翻訳スタイルを開発する余地が広がっているのですから。

翻訳者はまったく新しい翻訳スタイルを自分で開発しなければならないというわけではありません。新しい可能性を示す翻訳がいくつもあり、そこから学ぶことができるからです。わたしは翻訳という点で師匠についたことはありませんが、何人もの翻訳家から多くの点を学んでいます。出版翻訳では原著と訳書が出版されているわけですから、これという翻訳に出会えば、簡単に学ぶことができます。弟子入りをお願いする必要もないし、お礼を差し上げる必要もない。訳書と原著を買うだけで学べます。そうして学んだなかから、新しい翻訳スタイルの可能性を示す名訳を2つ紹介しましょう。

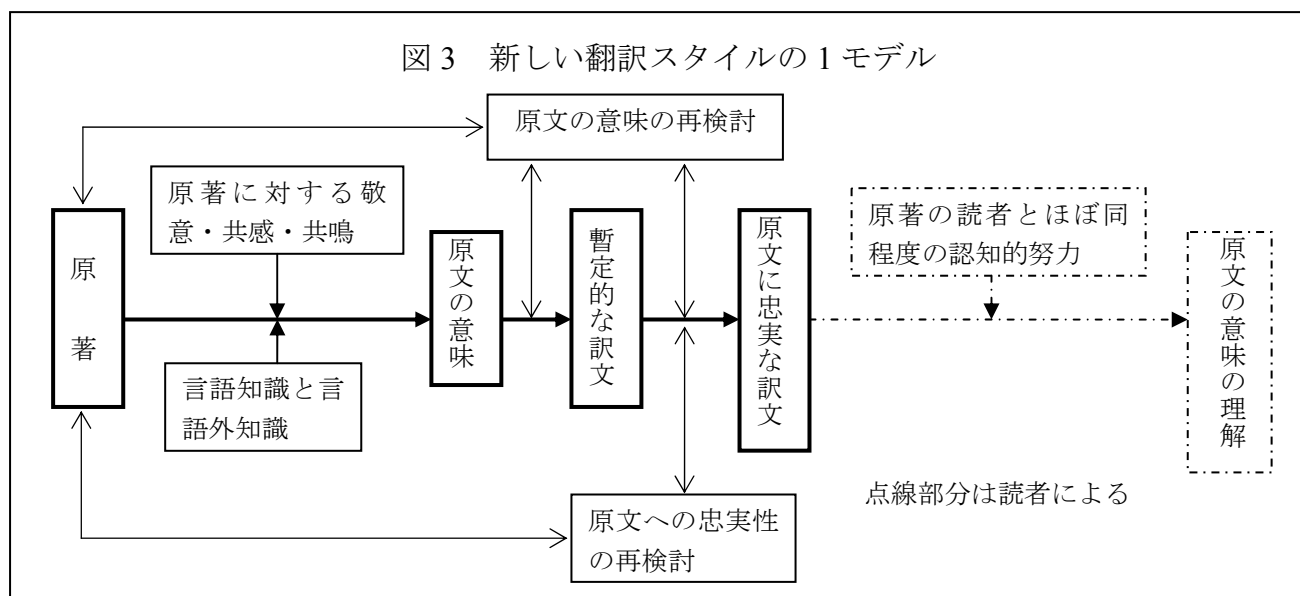
第1は土屋政雄訳フランク・マコート著『アンジェラの灰』です。この本については、ちょっとした逸話があります。ある日、友人から電話がかかってくる。『アンジェラの灰』を読んだ感激を伝えてくれました。経緯は忘れましたが、たぶん、その前にこの本を読むよう薦めたのだと思います。友人がいうには、通勤電車のなかで読んでいて、涙が止まらなくなって困ったとのことでした。50がらみのおじさんが電車のなかで本を読みながら涙を流しているというのは、確かに絵になりませんから、困ったというのもよく分かります。では土屋政雄の翻訳がここまでの感動を与えたのはなぜなのでしょう。

おそらく、土屋政雄が訳すのではなく、書いているからなのだと思います。著者になりきる翻訳、これが『アンジェラの灰』の特徴なのでしょう。原著への経緯、共鳴、共感に基づいて、原文の意味や内容から出発する翻訳なのだと思います。

訳すのではなく、書く。これをモデル化すると、図3のようになります（なお、この図では何重にもわたるフィードバック・ループは簡略化して表現しています）。翻訳調から完全に脱却し、原文の意味の理解を出発点にする翻訳が可能になるとも思えます。

第2は、これまでに何度も紹介した村上博基訳ジョン・ル・カレ著『スマイリーと仲間たち』です。最近、これほどの名著の名訳が絶版になっていると

図3 新しい翻訳スタイルの1モデル



知って衝撃を受けましたが、スパイ小説という分野であることが災いしているのでしょうか。村上博基の訳は原文の意味と表面のどちらにも忠実で、しかも美しい日本語になっていることに特徴があります。原文の語句を漏れなく訳しながら、美しい日本語で原文の意味を伝えているのです。翻訳は日本語勝負ということをこれほどよく示す例は、あまりないのではないかと思います。

村上訳は、翻訳調の良い部分、つまり原文への忠実性を重視する特徴を維持しながら、日本語としての質を高めていく方法をとっている点が印象的です。原文から離れていいのであれば、美しい日本語を書くのはある意味で簡単です。しかしそれでは翻訳にならないともいえます。翻案であって、翻訳ではないのだと。翻訳というからには、原文への忠実性を維持しなければならない。この点を村上博基訳から学ぶことができます。

ここでは新しい翻訳スタイルの可能性を示す例を2つあげましたが、これ以外にもたくさんの可能性はあるはずで、とくに若い世代の翻訳者が新しい翻訳スタイルを開発するよう願っています。若い世代はわたしが若かったころとは比較にならないほど、外国語に接する機会が豊富です。このため、翻訳調を出発点にする必要がない人が多いはずで、そのなかから、まったく新しい翻訳スタイルを編み出す人がでてくるよう期待しています。

教育に話題を移すと、ここにも大きな可能性が広がっているように思えます。翻訳の学習効果は現在は翻訳関係者だけの秘密になっていますが、これを学校教育と生涯教育に使えば、無限ともいえるほど

の可能性があると思います。学習効果が高いのは、教育効果が高いことを意味するからです。

誤解がないよう指摘しておきますが、ここで教育というのは、翻訳者育成を目的とする教育ではありません。翻訳を手段として一般教養を高めるための教育です。翻訳者育成のための教育についていうなら、わたしは翻訳専門になった直後から行っていますので、25年の経験があります。この25年間に教えた人の数はかなり多いのですが、そのなかで自慢できる弟子は5人ほどしかいません。その5人についても、仕事を紹介するという点ではたしかに寄与できたと思いますが、わたしが教えたから翻訳の質が高まったといえるかどうかは疑問です。翻訳者育成というのは、25年をかけて5人程度というほど効率が低いのです。

翻訳者はプロですから、育成するまでもなく、自分で実力をつけるものだと思います。先輩としてできるのは、優秀な新人を見つけだし、仕事を紹介することぐらいではないでしょうか。「翻訳通信」で今後、新人に発表の場を提供する方向を目指しているのはそのためです。

したがって、翻訳の学習効果を教育に活かすというときに対象にしているのは、翻訳学習者ではありません。たとえば生涯学習では、翻訳を学びたいという受講者ではなく、自然科学や社会科学、人文科学、文学などの幅広い分野のうちいずれかを学びたい受講者が対象になります。学習意欲が高く、時間に余裕がある人が何人かのグループで1冊の本を訳していくと、ほんとうに勉強になるはずで、学習のために翻訳するのであり、出版を目標にするわけ

ではないので、翻訳権を心配する必要はありません。受講者をもっとも興味をもつ本を訳していけばいいのです。この際に重要なのは、翻訳調に陥らないようにすることです。受講者はたいてい、学校英語で "Are you a girl?" = 「あなたは少女ですか」型の訳し方を学んでいるので、この方式から抜けだし、意味を伝える翻訳を目指すよう指導する必要があります。誰が指導するのか。翻訳関係者以外にはみあたらないように思います。

学校でも、現在は訳読教育がタブー視されていますが、意味を伝える翻訳のノウハウを活かせば、翻訳が素晴らしい教育手段になるはずで、英語学習の手段になるだけでなく、一般教養教育の手段にもなります。たとえば、経済学部の教養課程で、経済学の教科書を翻訳する授業を設ければ、教育効果が高くなるはずで、この方法はきわめて有望だと思うのですが、大きな問題があります。翻訳教育ができる教員が不足しているという問題です。英語の教員も経済学の教員も、翻訳調の翻訳を教育することはできても、意味を伝える翻訳の教育、いかにすれば教育効果がとくに高くなると予想される教育はできないと思われる。では誰が指導するのか。翻訳の実務を経験してきたものが最適だと思います。

翻訳関係者なら誰でも知っている翻訳の学習効果を翻訳関係者だけの秘密にしておくのはもったいない話です。翻訳関係者はこのノウハウを活かして社会に貢献することができるし、貢献すべきだと思います。翻訳関係者には教育という分野で、無限ともいえるほど大きな機会があるとわたしは信じています。

もうひとつ、辞書に関していうなら、ここにも大きな可能性が開けています。翻訳調のために作られた英和辞典は、いまでは完全に時代後れになっています。まったく新しい考え方に基づく英和辞典が登場してもいい時期になっています。

新しいタイプの英和辞典が登場するには、克服しなければならない問題がいくつかあります。前述のように、電子辞書の普及とともに紙の辞書が売れなくなり、開発費の回収が難しくなっています。新しい英和大辞典を編集しようとするとおそらく、10億円を超える投資が必要でしょうが、これだけの金額を出版社が投資するのは現状では不可能でしょう。違った仕組みか財源が必要になります。「翻訳通信」のサイトにリンクがある [DictJuggler](#) は新しい辞

書に向けた一歩にならないかと考えて開発した「翻訳訳語辞典」など、いくつもの辞書を検索できるサイトですが、広告収入で経費を賄っています。もっとアクセスが増え、広告収入が増えれば、用例と訳語をさらに収集できます。現時点ではアクセス数と広告収入が2桁から3桁不足しています。

もうひとつの問題は今後の翻訳と英語教育に必要な辞書の考え方が明確になっていない点でしょう。現時点ではインターネットの辞書がいくつか作られていて、入力を着実に増やしているケースもありますが、基本的な考え方は旧来の英和辞典と変わらないように思います。用例の数を重視する人もいますが、"Are you a girl?" = 「あなたは少女ですか」型の用例をいくら増やしても意味がないと思います。文脈から切り離れたとき、どんな用例も意味を失います。そのうえ、翻訳調のスタイルで訳されては、用例は役立たなくなります。

新しい英和辞典はまず、訳語ではなく語義を示すものであること、パラレル・コーパス（英和対訳型の全文データベース）に基づくものであることが重要だと考えます。この点でも、翻訳者が活躍する余地は大きいと思います。新しい考え方に基づく英和辞典を開発するにあたって、翻訳者が執筆の主力になる可能性もあります。たとえば、語義は本来なら日本語の世界から英語の語句がどうみえるかを執筆すべきですが、それにいたる第1段階として、英々辞典の語義を翻訳する方法が考えられます。まさに翻訳者の出番になります。それに、辞書に関して、翻訳者に匹敵するほどのヘビー・ユーザーがそういるとは思えないという事実もありますので、辞書の基本設計にあたって、翻訳者が活躍できる余地は大きいと思われる。

過去25年ほどに翻訳をめぐる環境は様変わりしてきました。翻訳そのものについても、関連する教育や辞書についても、いまほどの機会が開けている時期は過去100年になかったと思います。100年に一度の機会を活かすことができれば、これからは過去になかったほど面白い時代になるでしょう。しかしそのためには、翻訳関係者をもっともっと学ばなければなりません。翻訳の学習効果をさらに高め、翻訳で何ができるかを世間に示していかなければなりません。そのために「翻訳通信」がささやかにでも貢献できればと願っています。

翻訳とは何か—研究としての翻訳（その2）

「等価」（equivalence）という概念は翻訳を学び、実践し、研究する上で、必要不可欠な概念であり、「翻訳は等価に始まり等価に終わる」とさえ言えよう（Chesterman 1989, p. 99; Bassnett 2002, pp. 30-36）。100号で翻訳とは「言語的・社会的等価実現行為」とであると概括したが、本号からしばらくは多層性・多義性のある「翻訳」概念のうち、言語的等価実現行為に焦点を当てて論じる。今回は文法的等価実現行為を中心に考察してみたい。

翻訳とは何か—「文法的等価実現行為」としての翻訳

「ここはどこですか？」を英訳するとどうなるかと尋ねると、英語初學者なら必ず、“Where is here?” “Where is this?”などと答える。これは当然、“Where am I?”であるが、ではなぜこの英文でなければならないかと改めて問われると、答えに窮するのではないだろうか。

近時、言語は人間の外界に対する意味づけの反映であるとする認知言語学の観点から、諸言語を典型的に捉える認知言語類型論の分野が展開している（池上 2000；堀江・パルデシ 2009；坪本・早瀬・和田 2009 など）。これに拠ると、英語は言語で表そうとする状況をその状況の外から客観的に記述する志向性（外置の認知モード）があるのに対し、日本語はその状況に自らを埋没させて記述する志向性（認知のインタラクシオンモード）がある、という（中村 2004）。要するにこれは、外界を言語で表す際、発話者の視点（perspective）をどこに据えて言語化するかの問題である。英語の場合、発話者は発話をしている「いま・ここ」に視点を据えて、それを外から（off-stage）客観的に眺めたことを言語化するのに対し、日本語の場合、発話者が発話している「いま・ここ」から視点を移動して、言語化する対象である状況に視点を埋没させて捉えたことを言語化する、という分析である。

例えば、「君が来たら話すよ」を英訳すると、どうか。“I will tell you when you come.”ぐらいだろうが、よく考えてみると日本語は「来たら」と「タ」系を使っているところ、英語では“come”という現在形を取っている。しかし、これらはいずれも今より先、つまり未来のことを表しているのである（ここでは“I”と1つめの“you”が日本語ではゼロ化されていること、「よ」という終助詞のモダリティは論じないこととする）。日本語で「た」と言えば、普

通ならば「過去」を表すだろうという理解が一般的で、英語で動詞が過去形になっているときに、その日本語訳に「ル」形、つまり現在形を使っていると、これはけしからん！時制が違うではないか！などと表層的な理解で英日語を比較して憤る人を良く見かけるが、「君が来たら話すよ」の英訳で動詞を“came”にする人は誰もいないだろう。ここで英語と日本語の時制のシステムが異なるのではないかと気づく人であれば、表層的な言語形態の変換によって、等価な翻訳が実現するのではないことに気づくはずである。こういう言語的差異を生真面目に受け取りすぎると「翻訳不可能性」が頭をもたげることが、100号で取り上げたヤコブソンによると、

言語間翻訳は、ある言語のメッセージを別の言語の個々のコード・ユニットで置き換えるのではなく、メッセージ全体で置き換えることである。

（Jakobson 1959/2000, p. 139. 訳はマンデイ 2009 準拠）

であり、テキスト全体で考えれば、翻訳は可能なのである。可能ではあるが、等価実現のためには様々なシフトを生じさせる必要があることも事実であり（筆者はこれを「転換」（conversion）と呼ぶ）、等価を論じるにはまず両言語がどのような言語構造の差異を有しているのかについて深い考察を施さなければならない。その理論的枠組みを提供してくれる理論の1つが、言語類型論という分野である。

ひとまず、上記2つの疑問への説明を試みておきたい。（1）「ここはどこですか？」の場合、日本語では外界と外界を認識する者とがインタラクシオンを起こした対象を言語化する、という構成を採るので、自分は認知の対象からは外したうえで、自分がいる場を「ここ」と認知する。そして、「ハ」格でそれを主題にし（参照点）、ここという空間が「どこか？」と疑問符を投げかける（標的を疑問詞化）、という事態構成を行う。ところが英語では、その状況から認知主体を外置化させ、認知主体自体（つまり「私」）を言語化の主な対象（trajector と言う）に据えて主語にし、その「私」が「どこにいるか？」（斜格を疑問詞化）という構成を採るため、“Where am I?”という事態構成をし、それを言語化するというプロセスとなる。

つぎに（2）「君が来たら話すよ」の場合、そもそも日本語と英語の時制システムの相違について考えなければならない。

近時、ますます発展しつつある事態把握の仕方に関する日本語と英語との異同を論じた研究から引用してみよう。

絶対時制形式：絶対時制部門＋相対時制部門

相対時制形式：相対時制部門

絶対時制部門：動詞（述語）に付随する人称・数・法と一体化した時制形態素（屈折辞）が関与する時制部門

相対時制部門：絶対時制部門以外の時間に関する要素が関与する時制部門

英語では定形動詞（現在形・過去形）が絶対時制形式、非定形動詞（現在分詞・過去分詞・原形不定詞・不定詞・動名詞）が相対時制形式である。

日本語は定形（-ru 形・-ta 形）であろうと非定形（-te 形・-i 形）であろうと、述語はすべて相対時制形式である。

絶対時制部門が担う時制情報：話者の時制視点との位置関係によって値が定まる「文法的な時間帯」である「時間区域」が表す情報

相対時制部門が担う時制情報：出来事時と他の時間概念との時間関係が表す情報

「ル」形：出来事時が潜在的基準時と非先行関係

「タ」形：出来事時が潜在的基準時と先行関係

（坪本・早瀬・和田 2009, pp. 249-295）

以上を基に考えると、「君が来たら」「話すよ」は、「話す」という時点から見て「来る」という行為が先行しているため、「来る」が「タ」形、「話す」が「ル」形でマークされる。これは潜在的基準時に認知主体の視点が移動して、言語化する対象に視点を埋没させて捉えているのである。つまり、日本語では絶対時制形式はなく、相対時制形式を型にして、認知主体の視点の移動によって出来事時と基準時との相対的先行関係によって時制を表示する、ということになる。それに対して英語の場合は、発話者が視点を据える「いま・ここ」に時制視点を置き、come の出来事時を現在形でマークし“come”とする。同様に、will の出来事時も現在形でマークし“will”とする。つまり、英語では絶対時制形式を型にして、認知主体の視点を移動させずに時制を表示するのである。なお、この分析では主節の動詞の時制を論じるに当たって“come”ではなく“will”について

記述しているが、英語には時制としては現在と過去しかなく、“will”は現在の時点での「意志」ないし「推量」を表す（中核的語義は「意志」；佐藤・田中 2009, pp. 164-173）。この「意志、推量」という語義は多分に不確定性が強いので、現在の意志ないし推量だけでなく、「いま・ここ」から離れた現在の遠くのことを「推量」したり、未来のことに関する「意志」を述べたり「推量」を行ったりする話者の心的態度を表明する語彙項目である。この場合、“tell”は「原形」であって相対時制形式として unmarked（無標）である。逆に、従属節中の“come”は、単に「来るトキ」を表しているため、そこに「意志」性や「推量」性がないため、未来のことであっても「現在形」でマークするのである。

以上のように、主語（ないし主題）の言語化の仕方や時制に関してだけでも、日英語でこれほどの言語構造上の差異が観察されるということは、各言語のあらゆる文法項目についてその差異にすべて配慮しなければ翻訳は不可能であることを示している。また当然、言語によって何を文法化し、何を文法化しないか、あるいはそもそも何を言語化し、何を言語化しないかについて相違があり、これが翻訳に付随する「損失と付加（loss and gain）」（Bassnett 2002, pp. 36-37）となって発現するが、これはヤコブソンの言葉を借りると（英語のほうがわかりやすいので英語のままに記す）、

Languages differ essentially in what they **must** convey and not in what they **may** convey.

（Jakobson 1959/2000, p. 141. 強調は筆者による）

ということになる。そうすると、翻訳において言語的等価を実現しようとする、この“what they must convey”という部分で言語構造上、義務的な翻訳シフト（ズレ）が生じるし、“what they may convey”の部分で任意的な翻訳シフトが生じることになる。ここでの議論は、例として文法項目のうち主語の設定と時制を取り上げたが、あらゆる翻訳の文法的局面において見られる翻訳シフトを扱ったのが Catford の“A Linguistic Theory of Translation”（1965）である。

このモデルでは、言語はコミュニケーションとして分析され、文脈の中で様々なレベル（音韻、書記、文法、語彙など）とランク（文、節、語群、単語、形態素など）において機能するとし、まず言語の形式的な対応関係を両言語（起点テキストと目標テキスト）間で同定した上で、特定の箇所が等価（テキスト的等価）を実現する上でその対応関係がズレている場合、そのズレを「翻訳シフト」と呼んだ。キ

ャトフォードはこのシフトを2種類に分けている。

- (1) レベルのシフト：一方言語では文法で表現され、他方言語では語彙で表現される場合
- (2) カテゴリーのシフト
- ① 構造的シフト：文法構造のシフト
 - ② クラスのシフト：品詞転換
 - ③ ユニットのシフト／ランクのシフト：階層的言語単位（文、節、句、語群、単語、形態素）のシフト
 - ④ 体系内シフト：起点言語と目標言語がほぼ対応する体系であるのに、翻訳が目標言語において非対応の言葉を選ぶ場合
(Catford 1965。訳はマンデイ 2009 準拠)

ここでの翻訳シフトは文法的なものに限定されていると言ってよい。しかも、上記(2)④で露呈しているごとく、これは（いわゆる言語距離の近い）西洋言語間での翻訳シフトの分析であるので、言語ペアの相違を超越した普遍性を見据えた分析であるとは言えない。しかし、このような分析を言語学者が手がけたことは、翻訳の科学的分析の先駆けとなったわけであり、諸説批判はあろうとも、翻訳とは何かを学問として論じる（つまり翻訳学をやる）うえで極めて大切な理論であると言える。

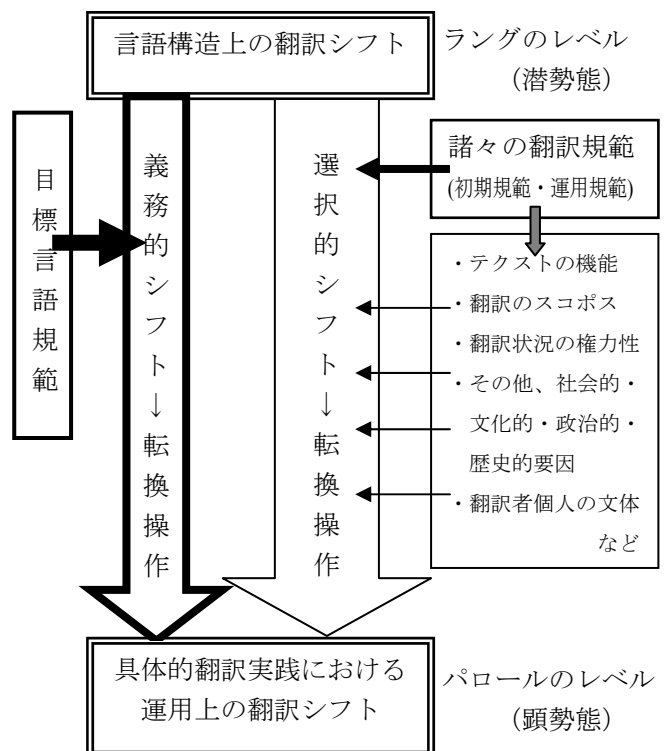
キャトフォードのモデルは、文脈を排除し、頭で考え出した作例に基づいたセンテンス単位での分析であったため、静的な対照言語学的なモデルに陥ってはいるが、現時点でこれを再解釈し、有用なモデルの一部に組み込むことはできる。そもそも翻訳シフトの分析は、翻訳プロセスを統御する翻訳規範の解明に必要不可欠な方法であり（Toury 1995; Chesterman 1997）、方法論上、次のことが言える。

- 一．義務的シフトと選択的シフトを抽出し、前者は起点言語と目標言語の言語構造上の差異のうち、規則性の強い文法項目としてマークする。そして、この項目一覧と従来型の言語類型論で論じられている項目とを照らし合わせ、符合するものを抽出して、義務的シフトの一覧を作ることで、強い目標言語規範としての翻訳規範の体系が得られる。
- 二．選択的シフトは起点言語・目標言語の「言語らしさ」（prototype）を司る文法項目で、規則性は弱く、原則論として捉えられる。選択的シフトを選ばない訳出は、起点言語の干渉を強く受けたいわゆる「異化」翻訳として目標言語の言語規範を更新する可能性のあるものであり（さもなくば受容されない翻訳と化する）、逆に、選択的シフト

を選んだ訳出は、目標言語らしい、いわゆる「受容化」翻訳として目標言語の言語規範になじんだものとなる。この選択的シフトを実際の翻訳結果から抽出し、それと認知言語類型論で論じられている項目と照らし合わせ、符合するものの一覧を作ることで、選択的シフトの体系が得られる。

近時、翻訳を言語学的なアプローチで分析することに対する激しい批判が多くなされているが（スコポス理論の陣営は概ね批判的な立場であろうし、文化的・社会的・イデオロギー的転回を主張する陣営はおしなべて批判的であると言える）、キャトフォード自身が「翻訳における等価は単なる形式的な言語的基準ではなく、機能や関連性、状況、文化といったコミュニケーションな特徴に依存している」と主張しているように、翻訳の言語行為性を統御している社会行為性の諸側面にも目配せをして初めて言語学的なアプローチがその本領を発揮するのであるし、逆に言うと、翻訳の社会行為性（社会的・文化的・政治的・権力的・歴史的などの側面）は、言表に現われている緻密な翻訳シフトの分析を通してしか確固たる裏づけが取れないのも事実である。

以上を踏まえると、上記の一．二．は起点言語＝目標言語間の言語構造が孕む「構造上のシフト」という位置づけになり、具体的な翻訳実践における「運用上のシフト」を併せて論じなければならない。翻訳シフトと翻訳規範との関係を簡単に図にすると次のようになる。



三. 運用上のシフトを、具体的な翻訳結果と起点テキストとを対象分析することで抽出する。そして、個別のシフトの背後にある社会的諸要因を特定し、当該翻訳行為の特徴分析を行う。

以上が「文法」に関する翻訳シフトをめぐる論点のあらましである。ここで「転換操作」(conversion)について触れておきたい。この「翻訳シフト」は起点言語と目標言語の言語構造の差によって不可避免的に翻訳が内包している言表のズレであり、静的な現象として捉えられるが、実際の翻訳プロセスという動的な次元では、このズレを実現するためにさまざまな転換操作(ズラシ操作)を行っている、ということになる。この操作の土台になる言語構造の違いは、どちらかの言語を外国語として習得した場合はそのすべてではないにしてもその多くを意識的に当該言語の文法として学習するものであるし、環境によって自然に獲得したバイリンガル(natural bilingualism)の場合には意識せずして獲得していると思われる。しかし、翻訳という作業のなかでは、その多くの部分が自動化し無意識化しているのも事実であろう。ところが、翻訳者がその一部を意識化し、自らの翻訳行為における指針や方針としている場合も多くあり、それが「訳出方略」(strategy)と呼ばれるものだと筆者は考えている。このあたりの概念(翻訳規範、翻訳方略、翻訳シフト、転換操作など)の相互連関については、論を改めたい。

翻訳という多義的で複層的な行為概念のうち「文法的等価実現行為としての翻訳」の側面にフォーカスを当てて議論をすると、以上ようになる。具体的な翻訳シフトの分析例は、拙著「[英日語双方向の訳出行為におけるシフトの分析—認知言語類型論からの試論](#)」を参照されたい(日本通訳翻訳学会・翻訳研究分科会(編)『翻訳研究への招待』第3号所収)。

ところが、この翻訳シフトというのは何も文法という言語構造のみに現われるものではない。翻訳シフトの概念範疇で「文体」について論じたものを次に若干紹介する。

翻訳とは何か—「文体的等価実現行為」としての翻訳

文芸翻訳は等価な美的効果を目的とする再生産的かつ創造的な営みである。

(Levý 1963, pp. 65-9. 訳はマンデイ 2009 準拠)

チェコスロバキアのレヴィーは翻訳シフトの文学

的側面、テキストの「表現的機能」や文体にフォーカスを当て、等価実現のためには

指示的意味、暗示的意味、文体的布置、シンタックス、音の繰り返し(リズムなど)、母音の長さ、音の明瞭度

を要素にテキストの特徴をカテゴリー化し、テキストタイプに応じて何が重要になるかが決まる、としている(Levý 1963)。その他チェコで文体的等価に取り組んだ研究者にミコ(Miko 1970)やポポビッチ(Popovič 1976)がいるが、詳細は省略する。

しかし、文体の問題は言語学でもまだ十分解明が進んでいるとは言えず、これを翻訳学の俎上に乗せて緻密な翻訳シフト論を体系化するには、かなりの力量が要るものと思われる。

翻訳とは何か—「言語的等価実現行為」としての翻訳

その他、文法や文体に限らず、翻訳の言語面にフォーカスを当てて等価(および実際には等価実現のためのシフトないし転換行為)を扱っているものとして、代表的には Koller (1979/1989) と Baker (1992) がある。

年代は前後するが、まずベーカーの5つの次元での等価概念(およびそれを実現するための転換操作)を扱った翻訳指導書では、

- equivalence at word level (語レベル)
- equivalence above word level (フレーズレベル)
- grammatical equivalence (文法レベル)
- textual equivalence: (テキストレベル)
 - thematic and information structure (主題進行)
 - cohesion (結束性)
- pragmatic equivalence (語用論レベル)

(Baker 1992)

の各等価について、規範的ではあるが等価実現のための翻訳シフト(転換操作)を指南している。そしてベーカーは、等価は「様々な言語的・文化的要因に影響され、したがって常に相対的である」という条件を付しているが(Baker 1992, p. 6)、これは翻訳指導書としてある種の規範を説くに当たって、現実の具体的な翻訳実践における等価実現行為、すなわち運用上の翻訳シフト実現行為(転換操作)においては、様々な社会的要因を考慮しなければならない、という極めて真つ当な謂いである(前頁図参照)。

また、カラーは重要な指摘をしていて、筆者がさ

きほど「言語構造上の翻訳シフト」と「運用上の翻訳シフト」を峻別したが、それとパラレルに「対照言語学」（当時は対照言語学どまりの研究であった）は「対応」（correspondence）を、「翻訳の科学」は「等価」（equivalence）を扱うとし、前者は「外国語の能力」が、後者は「翻訳の能力」が問題になる、としている。そして、等価のタイプとして、

- (1) 指示的等価：語彙、言語外的内容の等価に関わる。
- (2) 暗示的等価：文体的等価。同義語彙間の選択や文体的効果、フォーマリティなどに関わる。
- (3) テキスト規範的等価：テキストタイプ（Reiß 1977/1989）や話法に関わる。
- (4) 語用論的等価：コミュニケーション的な等価。動的等価（Nida 1964）に関わる。
- (5) 形式的等価：表現的等価。韻、比喩などテキストの形と美的価値観に関わる。

（Koller 1979/1989。訳はマンデイ 2009 準拠）

を提案している。そしてコラーは、コミュニケーション状況に応じて等価が階層化される必要性を説き、そのためのテキスト分析のチェックリストとして、

言語の機能、内容の特徴、言語と文体の特徴、形式的／美的特徴、語用論的特徴

を挙げ、翻訳の観点から見たテキスト的特徴の類型論の体系化の必要性を唱えている。

恐らく、包括的な翻訳シフト論（転換操作）を論じるには、これが到達目標だと思われる。コラーが提唱する5つの等価実現のための体系化・階層化とテキスト分析との相互連関を精緻化するのは至難の業であるが、それに到達するための理論整備のあり方として、本稿では「文法」にフォーカスを当てて、従来の「対照言語学」の手法のみならず、その発展形である「認知言語類型論」まで射程に入れながら緻密な議論をしていく必要性を説いた（つもりである）。コラーについても、機会を改めて論じたい。

翻訳学とは何か—翻訳テキスト分析としての翻訳学

具体的な論証は論を改めるとしても、翻訳規範という翻訳の社会的側面を論じるには、具体的な翻訳テキストの言表に現われている翻訳シフトを分析することが不可欠である（Toury 1995）。翻訳学が文化的・社会的・イデオロギー的転回を経た今日、翻訳をめぐる社会的コンテキストの分析や翻訳者自身を分析の対象にすることにフォーカスが当たるのも

理解できるが、翻訳テキスト自体の分析も研究に組み入れることによって、テキストを紡ぎ出すことが仕事である翻訳の真の実像により迫ることができる。筆者は考える。翻訳学は、①前・言語学的時代、②言語学的時代（後に語用論的転回を経る）、③文化的・社会的・イデオロギー的転回を経て今日に至るが、その次の段階として、④言語学的回帰（linguistic re-turn）が望まれる。この④は言語学的手法自体が、社会的転回（social turn）を経験したものであり、言語学はそうしたパラダイムを提供する理論のお膳立てをかなり展開させている。

参考文献

- Baker, M. (1992). *In other words*. London: Routledge.
- Bassnett, S. (2002). *Translation studies*. London: Routledge.
- Catford, J.C. (1965). *A linguistic theory of translation*. Oxford: OUP.
- Chesterman, A. (1989). *Readings in translation theory*. Helsinki: Finn Lectura.
- . (1997). *Memes of translation*. Amsterdam: John Benjamins.
- 堀江薫・パルデシ, P. (2009) 『言語のタイポロジー』 研究社
- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』 講談社
- Jakobson, R. (1959/2004). 'On linguistic aspects of translation'. In Venuti, L. (Ed.). (2004). *The translation studies reader*. 2nd edition. London: Routledge.
- Koller, W. (1979/1989). Equivalence in translation theory. translated from the German by Chesterman, A. In Chesterman, A. (ed.) (2004). pp. 99-104.
- マンデイ, J. (著)・鳥飼玖美子 (監訳) (2009) 『翻訳学入門』 みすず書房 [原著 Munday, J. (2008). *Introducing Translation Studies*. London: Routledge.]
- 中村芳久 (編) (2004) 『認知文法論Ⅱ』 大修館
- Nida, E. (1964). *Toward a science of translation*. Leiden: Brill.
- Reiß, K. (1977/1989). Text types, translation types and translation assessment. translated by Chesterman, A. In Chesterman, A. (ed.) (2004). pp. 105-15.
- 佐藤芳明・田中茂範 (2009) 『レキシカル・グラマーへの招待』 開拓社
- Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam: John Benjamins.
- 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編) (2009) 『「内」と「外」の言語学』 開拓社

北朝鮮の人々はどのように生きているか

昨今の日本における韓流ブームには目を見張るものがある。ドラマから始まり美容、食事、健康法、さらにはアイドルグループまでもが日本人を虜にし、今では日本のメディアにとって韓国はなくてはならない存在となっている。しかし、各方面での韓流熱とは相反して、書籍の分野では美容や健康に関するものを除いて韓国の本がまだまだ少ない。今後、「翻訳通信」の場を借りて、私が興味深かった本や今韓国で話題の本を紹介し、少しでも多くの読者の方に韓国の良書を知って頂きたいと思う。

今回は『北朝鮮の人々はどのように生きているか（原題：북녘사람들은 어떻게 살고 있을까?）』という本を紹介する。この本は、南北の統一を目指している「民族 21」という会社が北朝鮮の人々の日常生活を調査し記録したものである。その記録は北朝鮮の人々が生まれてから死ぬまでに至り、普段私たちが日本のメディアだけでは知ることができないものばかりだ。

北朝鮮の人々といえば、外国に住む私たちから見ると少し変わった、何を考えているのか理解がしがたい印象がある。しかし本書を読み進めていくと、北朝鮮の人々と私たちは類似している点が数多くあることが分かる。例えば次のような文章がある。

「ジョンヒ（娘）は一生懸命取り組んだ子どもや良いことをした子どもに幼稚園から送られる赤い星型の紙をよくもらってきては自慢していた。赤い星をたくさん集め（中略）学習帳をもらったこともあった。学校まで迎えに来た私を見るとすぐに受けとった学習帳を高く掲げ、その意気揚々とした表情と言ったら…」（第一章「生まれてから託児所、幼稚園まで」から抜粋）

これは北朝鮮のある母親が抱いた自身の娘へ対する思いである。一生懸命取り組む子どもと我が子の頑張りを喜ぶほほえましい親子の姿は日本も北朝鮮も変わらない。また北朝鮮は結婚に対しても私たちが想像する以上に自由だ。いわゆる“できちゃった婚”もよくあり、また離婚や再婚に対しても大変開放的で社会的に受け入れられないということはない。

近年、北朝鮮に関する本と言えば政治的な内容や奇をてらった内容のものがほとんどであるため、生まれてから死ぬまでの市民の日常生活に焦点を当て、批評することなく淡々と記録している本書は大変貴重であると言える。本書を読んで北朝鮮の人々の日常の喜びや悲しみ、葛藤などの“人間らしさ”をぜひ読者の皆さんに感じて頂きたい。

題名：北朝鮮の人々はどのように生きているか

原題：북녘사람들은 어떻게 살고 있을까?

頁数：318 頁

著者：民族 21

出版社名：図書出版 선인

発行：2004 年 6 月 29 日

著者：民族 21 株式会社（2000 年 8 月に設立した会社。その事業は言論、出版、展示、広報、対北事業コンサルティングなど多岐にわたる。本書は民族 21 が刊行している「月刊 民族 21」で 1 年間にわたる連載をまとめたもの）



『北朝鮮の人々はどのように生きているか』表紙

本書に対する韓国読者の感想（韓国の検索サイト NAVER「ネチズンのレビュー」より）

大学の授業の参考書として読んだ。北朝鮮の人々の日常生活が書かれた話の中で私たちと似ている姿、違う姿を知ることができた。北朝鮮の人々は私たちとは違う人間ではなかった。彼らは私たちよりも劣っているのではなく、少し違う生き方をしているのだと考えるようになった。（男性）

北朝鮮に対する本はだいたい歪曲されている。多くの北朝鮮に関する本の中で、大きく歪曲されていない北朝鮮の日常を知ることができる数少ない 1 冊だ。中でも 2004 年に発行された点に驚いた。政治的・経済的危機を象徴する苦難の時期を乗り越えた後の北朝鮮人の記録であるため、最近の北朝鮮を理解する上で本書はきっと役に立つだろう。（女性）

DictJuggler.netのバージョンアップ

この『翻訳通信』の配信者の山岡さんと、同じく翻訳家の藤本直氏のご協力を得て、**文章に携わる人**
ディクトジャグラー
のための辞書・検索サイト [DictJuggler.net](http://www.dictjuggler.net/)
(<http://www.dictjuggler.net/>) の運営を開始して早くも3年を超えた(サイト開設の経緯については『[翻訳通信](#)』の2007年4月号に詳しい)。

DictJuggler.net (以下 **DJ.net**) のひとつの役割は、辞書データの提供だ。オープン当時は山岡さんの『翻訳訳語辞典』と藤本直氏の『類語玉手箱』のふたつの辞書だけだったが、その後山岡さんの『経済・金融訳語辞典』と、環境問題翻訳チーム・ガイアの『環境訳語辞典』が加わり、合計4種類の辞書データを公開している。いずれの辞書も翻訳者の方々が、翻訳作業の合間に時間をかけて作られた力作だ。

もうひとつ **DJ.net** の役割がある。それは、文章に携わる人、とくに翻訳者の調べ物を便利にすることだ。翻訳者の方々はご存じだと思うが、どの分野の翻訳をするときにも調査は欠かせない。私たちが駆け出しの頃は図書館通いが必須だったが、今ではインターネットが以前の図書館の役目(の多くの部分)を果たしてくれるのでだいぶ楽になった。

だいぶ楽にはなったけれども、面倒ではある。何が面倒かといったら、いろいろなサイトにあたらないといけないことだ。翻訳者以外の方もお読みだろうから、もう少し詳しくご説明しよう。

たとえば、英日翻訳をする場合ならば、英和辞典は必須だ。ただし、ひとつの辞書(サイト)では済まないことも多い。[英辞郎 on the WEB](#)は登録単語数が多く、例文なども豊富なので、先ずあたるのには便利なのだが、結構間違いがあるし基本的な単語の重要な意味が抜けていたり文法的な事柄の確認ができなかったりして、残念ながら今ひとつ信頼感に乏しい。そこで、[Yahoo!辞書](#)などのお世話にもならなければならない。

細かいニュアンスになると英和辞典では足りなくて、英英辞典が必要になる。私はiPhone用のアプリもある[Dictionary.com](#)をよく使うが、場合によって

は[Merriam-Webster](#)にもお伺いを立てる。

時には辞書に載っていない単語が使われることもある。昔だったら専門書をあたるどころだろうが、今は[Google](#)などの検索エンジンという強い味方がいる。書籍に載っているような単語ならば、ネットで使われていないことはまずないので、訳語は見つからなくても、意味は検討がつくぐらいの情報が得られる。

訳語を検討する段階になると、とくに基本的な単語の訳に悩んだときには **DJ.net** で公開中の『翻訳訳語辞典』を引く。「もうちょっと別の表現があったような気がするのだけれど」という時はこれまた **DJ.net** で公開中の『類語玉手箱』が欠かせない。

自分の書いた単語が意味的におかしくないかチェックするには国語辞典を見る必要があるし、「この表現は一般に使われているのだろうか」と疑問がわけば(表現を"..."で挟んで) [Google](#) で使用例を検索してみる必要がある。何万件もヒットすれば、自分の思い込みでないことが明らかになるので、使ってよい表現である確率はぐっと高くなる。

私が行うことが多いコンピューターソフトウェア関連の翻訳では、実際にウェブページやプログラムを作って試してみなければならぬことが多い。このため、ウェブページを作るのに使う HTML や CSS のリファレンスを見たり、PHP、JavaScript、Java、C++、…といったプログラミング言語の「オブジェクト」や「関数」の一覧を検索できるサイトのお世話になることも多い。

ややこしいのは、さまざまな検索がランダムな順序で行われることだ。たとえば英日翻訳作業では、英和辞典で英単語の意味を調べながら、『翻訳訳語辞典』で日本語の訳語を捜し、もっとピッタリくる表現がないか『類語玉手箱』にもあたる。さらに勘違いをしていないか内容を検証するために専門分野のウェブページを検索する。見つかったサイトが英語で書かれていてわからない単語が出てきたので、さらに英和辞典を引く。ところが、ピッタリした意味が見つからないので英英辞典にあたる。それでも、

意味がよくわからないので、さらに Google で使用例を確かめてみるといった具合に、辞書サイトをあちこちハシゴしなければならない。

DictJuggler.netの新バージョン

こういった複数のサイトでの調査を簡単にするというのが、この『翻訳通信』の 100 号記念のお祝いに合わせて β 版（ほぼ完成版）を公開した **DJ.net** の今回のバージョンアップの目玉だ。

複数の辞書を一度に引きたいという願望は翻訳者に共通だと思うが、問題は人によって引きたい辞書が異なることだ。翻訳対象の分野によっても違うし、好みによっても違うだろう。

理想は、その人の置かれた状況を判断し、入力された語句に対して自動的に辞書を選択して欲しい情報を提供してくれることだ。検索対象の語句にはいろいろな属性が付いている。その属性を頼りに、この辞書を引いてあげたら喜びそうだと判断できる場合も少なくはないはずだ。

大雑把に考えれば、英日翻訳をしていて英語の単語が入力されたら、英和辞典か『翻訳訳語辞典』を引きたい確率はかなり高そうだ。日本語の単語が入力されたら国語辞典か『類語玉手箱』が多いだろう。ただ、英語の場合でも英英辞典が引きたかったり Wikipedia を引きたかったりする場合もあるだろうし、日本語でも Google 検索をしたいのかもしれない、といった具合で、何をしたいのかを高い確率で当てるのは容易ではない。

そこで **DJ.net** の新バージョンでは、どれかひとつに絞ることはせずに複数の辞書を一度に引いてしまうことにした。英単語が入力されたら、英和辞典も『翻訳訳語辞典』も Google も検索してしまう。日本語が入力されたら、国語辞典も『類語玉手箱』も Google も検索してしまう。いわば、「下手な鉄砲も数打ちゃ当たる」式の解決策だ。インターネットの混雑を助長するような解決策で少し申し訳ないが、質の高い翻訳のためにはご勘弁いただきたい（違法ムービーをバンバン複製するのに比べたら、はるかに罪は軽い？）。

また、翻訳対象（作業）が異なると引きたい辞書も変わるだろうから、作業ごとに検索する辞書（サイト）を分けることにした。現在は「英日翻訳」

「日英翻訳」「経済分野」「環境分野」「日本語原稿執筆」「英語原稿執筆」の 6 分野だ。「経済分野」と「環境分野」が特別に設けられているのは、**DJ.net** に『経済・金融訳語辞典』と『環境訳語辞典』がすでにあるので、これを優先してのことだ。

たとえば、「英日翻訳」を選択すると以下の辞書（サイト）が一斉に検索されて、その結果が表示される。

●英数字や記号からなる語句が入力されたとき

- ・ 翻訳訳語辞典
- ・ 英辞郎 on the WEB
- ・ Google 検索
- ・ 英英辞典 (Dictionary.com)

●日本語を含む語句が入力されたとき

- ・ 類語玉手箱
- ・ Yahoo!の国語辞典
- ・ Google 検索

日英翻訳の場合は次のように変わる。

●英数字や記号からなる語句が入力されたとき

- ・ 翻訳訳語辞典
- ・ 英辞郎 on the WEB
- ・ 英英辞典 (Dictionary.com)
- ・ Google 検索

●日本語を含む語句が入力されたとき

- ・ 翻訳訳語辞典
- ・ 英辞郎 on the WEB
- ・ Yahoo!辞書・日英
- ・ Google 検索

なお、どの辞書を表示すればよいのかは皆さんのご意見などを参考に変更する可能性があるので悪しからず。上記は 2010 年 9 月末現在のものだ。

辞書の種類や順番が「私の好みではない」という方のために「お好み」という選択肢も用意した。「お好み」のページでは、自分のよく使う辞書（サイト）をあらかじめ選択しておいて、最高 10 個の辞書の一括検索ができる。そして、検索対象が英語の場合と、日本語の場合を分けて指定できる。選べる辞書は、今のところはこちらが用意したものだけだが、ひと通りのものは揃っている。

ウィンドウのレイアウトも変えることができる。大きめのモニタを使っている方は、トップメニューの「設定」で「画面の横幅が広いとき、ふたつの辞書を横に並べて表示する」を「YES」に設定すると便利だろう。また、各辞書の縦幅（高さ）も変更できるのでお好みの高さを設定されたい。

その他の改良点

ここまでは今回のバージョンアップの目玉である、複数辞書一括検索機能をご紹介したが、この他にも以下のような改良を施した。

そのひとつめが小窓版 *DictJuggler Mini* だ。以前からマッキントッシュの「ダッシュボード版」を公開していて、アップルのメルマガで紹介されたり、『DVD 付きフリーウェアセレクション』といった書籍にも何度か掲載された便利な小物だ。ちょっと知恵を絞って、普通のブラウザでも使えるようにした（それほど時間をかけずにできてしまったので、もっと早く知恵を絞ればよかったのだが、自分ではマッキントッシュ版が使えたので真剣に考えなかった。意識をしないとなかなか気がつかない）。

小さな窓に語句を入力して、辞書を指定して検索すると、検索結果がブラウザウィンドウに表示される。本格的な翻訳作業には、*DJ.net* 本体のページが便利かと思うが、そのほかの作業には「小窓版」のほうがお役に立つかもしれない。

もうひとつはiPhone用ページの公開だ。iPhoneで [DJ.netのトップページ](#) にアクセスしていただければ自動的にiPhone用のページに移動する。「小窓版」と同じように、いろいろな辞書に簡単にアクセスできるのでお試しいただければ幸いだ。

最後にもうひとつ、これはじつは1年ほど前から公開していたのだが、これを機会に書籍検索の *AmazonJuggler* もあらためてご紹介しておこう。トップページから「書籍検索」を選択すれば使える。自分の翻訳した本の Amazon のランクやレビューをチェックするのにとても便利なページだ。洋書について、日本と米国の Amazon の両方でランキングやレビューを一度に見ることもできる。編集者の方には、自社の本のランキングが簡単に見られる機能がおすすめ。どなたも一度お試しあれ。

お願い

先日開かれた『翻訳通信』の100号記念パーティの際にいろいろな方から辞書サイトや辞書の使い方を教えていただいて、とても参考になった。そのいくつかは *DJ.net* でも採用させていただいた。

ご自身がお使いの辞書サイトや検索サイトがまだ *DJ.net* で使えなかったら、あるいは「こんな機能が欲しい」といったご希望をお持ちなら、ご連絡いただけるとありがたい。技術的に難しいものもあるが、*DJ.net* に追加可能なサイトは多いし、難しいかと思える機能も案外簡単に実現できてしまうこともある。改善点のご提案は大歓迎。できるだけ迅速に対処するので、ご連絡願えるとありがたい（ないようには努めているが、もし見つかったら不具合のご指摘もお待ちしている）。他人からのプレッシャーが私を含む多くの開発者の最強の「開発エンジン」なのである。

☆

サイト開設からの3年余の間に私生活にもさまざまな変化があった。田舎に住む父は「元気の塊」のような人だったが卒寿を迎えさすがに足下もふらつくようになってしまった。母は認知症になって介護施設に入所。義父は3年前に他界し、残された義母は我が家から徒歩5分の介護施設に入所。こんな状況になると「俺たちも先はあまり長くないなあ」と、身にしみて感じるようになる。同じ人生ならば、皆さんのお役に立つものを残して旅立てたらと思う。*DictJuggler.net* がそんなものになってくれれば、望外の幸せである。

最難関を目指す「翻訳通信」翻訳コンテスト

一読したぐらいでは理解できない文章こそ、翻訳する価値がある。そういう観点から、難しい課題の翻訳を競うコンテストを企画しました。

第1回の課題は J.S. Mill, *The Principles of Political Economy*, Book 4, Chapter 6, *Of the Stationary State* です。読めば分かるように、アダム・スミス『国富論』第1編第8章やトマス・マルサス『人口論』の見方を批判したものであり、150年前に書かれているものの、現代的な意味が大きいとみられます。これを課題に選んだのは、経済学文献のアンソロジーを企画しており、そこに収録したいと考えているからです。

翻訳は容易でないので、腕の見せ所がたくさんあります。とくに、原文の論理をどう伝えるかが難題です。いわゆる翻訳調ではミルの論理を日本語で伝えるのは難しいので、翻訳のスタイルと訳文の文体を工夫する必要があります。

アンソロジーに収録したい文献なので、優秀作は出版用に採用する計画です。優秀作の賞金、賞品などはありませんが、出版に使った場合には当然ながら、印税が発生し、出版社から現金で支払われます。ただし、出版時期は決まっていませんし、アンソロジーの企画自体が実現しない可能性もあります。ですから、優秀作に選ばれた場合にも、当面は「翻訳通信」の紙面で紹介されるだけだとお考えください。

応募者の年齢、翻訳経験、職業などの制限は一切

ありません。たとえば、訳書が100点以上ある翻訳家でも、1点もない学習者でも応募できます。ただし、グループ訳は受け付けません。何人かのグループで検討した場合にも、各人がみずからの責任で応募してください。制限はこの点だけです。

古典の翻訳では既訳を参考にするのは当然です。参考にした場合には、訳文の終わりに参考文献としてあげてください。ただし、既訳を参照した結果、翻訳の質が低下する場合があります。既訳は手に入りにくいので、無理をして入手する必要はないと考ええます。図書館などで既訳を探す時間を原文の読み込みにあてた方が良い結果になる可能性は充分にあります。

応募要領

課題：[J.S. Mill, *Of the Stationary State*全文](#)（以下に冒頭部分を示します）。

書式：[所定のフォーム](#)でMSWordで作成

締め切り：2011年1月10日

送付先：電子メールの添付ファイルにて以下に送付
GFC01200 アット nifty.ne.jp（アットは@に変更）

電子メールの件名：翻訳コンテスト応募

電子メール本文に以下を明記ください。

氏名：

本名（氏名が筆名の場合）：

住所：

職業：

電子メール・アドレス：

Of the Stationary State

1. The preceding chapters comprise the general theory of the economical progress of society, in the sense in which those terms are commonly understood; the progress of capital, of population, and of the productive arts. But in contemplating any progressive movement, not in its nature unlimited, the mind is not satisfied with merely tracing the laws of the movement; it cannot but ask the further question, to what goal? Towards what ultimate point is society tending by its industrial progress? When the progress ceases, in what condition are we to expect that it will leave mankind?

It must always have been seen, more or less distinctly, by political economists, that the increase of wealth is not boundless: that at the end of what they term the progressive state lies the stationary state, that all progress in wealth is but a postponement of this, and that each step in advance is an approach to it. We have now been led to recognize that this ultimate goal is at all times near enough to be fully in view; that we are always on the verge of it, and that if we have not reached it long ago, it is because the goal itself flies before us. The richest and most prosperous countries would very soon attain the stationary state, if no further improvements were made in the productive arts, and if there were a suspension of the overflow of capital from those countries into the uncultivated or ill-cultivated regions of the earth.（注意：これは冒頭部分のみです。[全体はこちらにあります。](#)）

「訳したい本」の投稿の呼び掛け

翻訳者へ

今月号には、福田知美さんから「おすすめした韓国の本」をテーマにした投稿をいただきました。「翻訳通信」では同様の投稿を歓迎しています。

原著者の死後 62 年（第 2 次世界大戦の戦勝国以外で出版された本の場合は死後 50 年）を経過して翻訳権を取得する必要がなくなった本であれば、「翻訳通信」に翻訳を掲載することが可能です。原著の著作権保護期間がきれていない場合には、翻訳を掲載することはできません。

しかし、今月号の福田知美さんの投稿のような形であれば、新刊でも、出版からそれほどの期間が経過していない本でも、紹介することができます。また、10 行程度までの引用であれば、紹介文のなかに一部分の翻訳を示すことが可能です。

翻訳者の立場では、英語以外の言語で書かれた本であれば、韓国語やドイツ語、フランス語などで書かれた本では、新刊でも情報が不足していることが多いので、紹介する意味はあるでしょう。

英語の場合には、アメリカやイギリスで出版されたばかりの新刊を紹介する意味はあまりないと思います。編集者の方がはるかに豊富な情報をもっているからです。原著の出版から数年が経過して訳書が出ていない本や、訳書が絶版になっている本であれば、紹介する意味は充分にあります。名著という評判の高い本でも、訳書が絶版になっている場合は意外に多いものです。とくに、既訳の質がそれほど高くない場合には、改訳する意味が充分にあるので、翻訳者にとっては狙い目でしょう。このような本では、内容を紹介することより、翻訳の質をどう高められるか、現時点で新訳を出版する意味がどこにあるかに重点をおくべきかもしれません。

翻訳者にとって、原著者や著書に対する敬意や熱意、共鳴、共感が強い本を訳するのがいちばん幸せだし、翻訳の質も高くなると思います。そういう観点から、この本を訳したいという翻訳者の希望を編集者に伝える場として、「翻訳通信」を活用いただけるよう希望しています。

編集者へ

「訳したい本」で紹介された本についてもっと詳しく知りたい場合には、投稿した翻訳者に直接に連絡してください。連絡先が分からない場合には、山岡まで連絡ください。「翻訳通信」の表紙に連絡先を示してあります。連絡いただければ、翻訳者を紹介する場合がありますし、電子メール・アドレスをお教えして直接に連絡いただく場合もあります。いずれの場合にも、紹介料などをいただくことは一切ありませんが、翻訳者の力量を保証するわけではありませんので、ご了承ください。

また、「この本の訳者を求む」という投稿を歓迎します。訳者を選ぶためのコンテストの開催も可能です。この場合にも紹介料などは一切いただきませんが、翻訳者との間で後に印税や翻訳料でトラブルになることだけは避けたいので、翻訳の条件をあらかじめ示すようお願いする場合がありますので、ご了承ください。

「翻訳通信」は翻訳者、編集者、読者の出会いの場になることを目指しています。そのような目標にあった企画の提案を歓迎します。企画案があれば、山岡まで連絡ください。

投稿規定

[「翻訳通信」投稿規定](#)を参照ください。